

フィンランドからの助っ人とコース整備

スキーオリエンテーリング世界選手権 2009 ルスツ大会

モービル隊
高橋仁紀

スキー0 大会で最も苦労が絶えないのがトラック整備作業。モービル隊の高橋仁紀から見たルスツ大会。



フィンランド人から来た助っ人軍団のタフガイたち。タピオ(左)、コルテニエミ(後)、ハンヌ(中央)、アンティ(右)

重要なのはコミュニケーション

私の今大会の目的は「選手を目線にたって」の大会運営と位置づけていました。

大会を成功させるには、限られた少人数のスタッフの互いの連携と、異国のスタッフとの意思疎通が一番重要であると考えていました。若いアンティと父ハンヌ、お酒が好きなタピオ、そしてモービルランド信原と従業員の方々が主なトラック設置の仲間でした。

世界標準のトラック整備

SKI-0 世界選手権大会のトラック基準がどのようなものなのか1996年リレハンメル大会から、これまで経験してきたSKI-0のトラック設置方法、運営方法等をも再確認したいと考えていました。

国内では真室川大会は幾度と開催してはいたが、はたして選手強化や普及にどれだけの成果があったかもこの目で確かめたいと望みました。

今大会は真室川での代表選考会とは違い、スノーモービル道のトラックに関しては均平板(きんぺいばん)を使用することになりました。

私自信、この均平板を使用するのは初めてで、排気量の大きいスノーモービルでなければ重い均平板を牽引することは困難であるとはいいながら、私がルスツに入るころには大まかなトラックはフィンランド助っ人に整備されていました。しかも250ccのスノーモービルで。

スノーモービル機材提供に伴い、信原さんはじめルスツリゾート・モービルランドスタッフの協力がなければ出来なかった。寒い中、毎日のガソリン補給やメンテナンスは、たとえ仕事だとしても感謝いたします。

でも250ccのモービル数台は、エンジンに負担がかかり不調のため使用出来なくなる。

あくまでもトラックは均平板を使用することが大前提でした。と言うことはロングで使用するアップダウンの山の中も均平板を引くという事になる。現状のままでは無理である。SEA彼らの世界基準のトラックメイクなら、そうするしかないのだろうと疑問には思えたがルール上はトラック幅では問題ないはずです。



モービルの後ろで板を引いて幅広のトラックを整備する

パウダースノーと格闘

私とアンティがペアで、ロングコースで使用する山の中を主に整備していました。もともとトラックメイクにかかる人員は少ないため、SEA3人と私で主に山の中へ毎日出勤。昼食は朝のバイクでゲットしたバナナ1本にドリンク、翌日からはバナナ2本に。次第にコンビニのおにぎりや栄養ドリンクも。スタッフが足りない現状からなるべく準備を急がなければならず、ホテルに戻ることなく朝から夕方5時までひたすらトラックの幅だしやモービルが通りやすいように北海道のパウダースノーと格闘。

山の中でモービルがスタックするものなら1人では脱出不可能に近く無理です。アンティがスタックすれば私が助け、私がスタックしたらアンティが助けとといった事が毎日繰り返されます。

排気量の大きいスノーモービルがパウダースノーで身動き出来なくなったものなら、引き上げるのに体力は寒さと共に消耗。体格のいいハンヌ・タピ

オも幾度となくスタックしSOS、私もスノーモービルで転倒したり、立ち木に衝突・SOSということもあり、スコップで雪をかきながら脱出。モービルランド信原さんには大変ご迷惑をおかけしました。大会終了時、お蔭様で体重が5kgは減りました。



トレイン内の水系に架けられた橋。コース設定上でどうしても必要な箇所で作られた。

トラック整備をコースに反映

人のやることにはミスはつきもの。SEAでさえ見逃している所もあり、地図と細かいネットの修正は大会前日まで繰り返された。マップ・ポスト確認作業や真室川方式の竹竿設置などは武石・橘・村越・木村・高島・信原・幸山の助けもあり競技は開催されました。

お互いを理解しあいながら準備出来た事が、大会成功につながったと考えます。

Good Job !

ルスツに入ってから夜の夜は、SEA彼らの部屋に出向き、トラックメイクのミーティングをしながら、コルテニエミ・タピオが大好きなドブクロを飲みながら意思疎通?

晴天の最終日、リレー競技がはじまるころには『いい仕事をした』と互いに握手。競技終了後、真室川町へ戻らなければならずバンケットには参加できなかったが、アンティから記念に今大会でトラックをつくる際に使用した枝打ち斧(刃はボロボロ)をもらいました。この斧が世界基準のトラックをつくったのでしょうか。こうして、慌しく私の任務は終了。フィンランド助っ人の長い生活も終了です。

いい経験をさせてもらいました。今後も永続的に国内においてSKI-0大会が開催され日の丸が表彰台にのる日を楽しみにしています。

(高橋仁紀)